五つの歪んだ愛の形

ぽぽろ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

五つ子と言えば全て一緒に思うだろうが
五つ子と言えど全てが同じでは無い
性格や好物、癖、異性の愛し方
しかし共通点も勿論ある
それは…
ある１人の男性―上杉風太郎　に向けられる歪んだ愛
強すぎる程の歪んだ愛情である…

タイトルはヤンデレですがヤンデレ以外の純愛物も書く予定です。

目次

番外編
五人と図書室と密会と ―― 1
ｉｆと最後と結婚 ―― 8
三女と振りとデート ―― 13
ドキッ☆ヤンデレだらけの大運動会！ ―― 20
五人と海と最後　前編 ―― 28
五人と海と最後　後編 ―― 33
本編
五つの歪んだ愛の形　プロローグ ―― 37
長女とデートと愛 ―― 40
長女と仕事と愛 ―― 43
次女と後悔と嫉妬 ―― 50
次女となんか…その…あれだよ！あれ＋おまけ ―― 55
三女と距離と告白 ―― 59
三女と遅れてごめんね？ ―― 65
五女と出会いとデート ―― 71
五月と本当の気持ち ―― 75
四女と五つ子会議と闇　改訂版 ―― 79

番外編
五人と図書室と密会と

「どうするかなぁ」
彼―風太郎が悩んでいるのは、自分の家庭教師の教え子達とアイツらの束縛
流石にアイツら以外の女を見るな。は難しくない？
何でそんな束縛するんだ…
とりあえず今は勉強だ
「国語は…竹取物語とかでいいか」
と考えていると
「上杉…君？」
「誰だ？」
知らない女子から話しかけられていた
髪は青紫色、赤く細長い眼鏡を掛けていて髪はショートカット
姿はあいつらほどでは無くても出る所は出ていて、引っ込む所は引っ込んでいる
一般的という言葉を体現した女だった
名をば南さくらと…
竹取物語に引きづられすぎた。
「なんか用か？」
「上杉君って勉強教えるの上手…何だよね？」
「誰から聞いた？」
「二乃さんから」
あいつめ…余計なこと言いやがって
あのコミュ力の塊は、友達が多い。
だから色んな人と友達になれるからこいつにも話しかけて行ったんだろう
「えっと…勉強で教えて欲しい所があるんだけど…」
「ことわ…」

そこである事を思い出した。
1番最初の五月との事
あいつの頼みを拒否したが為に、勉強教えるまで苦労した
だからこれから何があるか分からない
こいつも実は金持ちで家庭教師をやってくれ
と言われたら五月の二の舞になるかもしれない
後はアイツらに教えるいい方法が見つかるかもしれない
そのことから
「図書室でいいか？」
承諾した
「うん！」
…意外だな
俺はクラスの人から感知されて居ないものと思っていた。
あいつらと結構一緒にいる事が多いから覚えられているのか？
まぁいい。
「何処が分からないんだ？」
アイツらの反省を踏まえ出来るだけ優しく
「あっ、えっと、ここなんだけど。」
「そこか。そこはちょっと難しいよな。」
アイツらより理解力がいい。素晴らしい
ふと外を見ると、空は赤く染まり太陽がさよならをしている所だった。
「そろそろ終わるか」
「あっ。ごめんね…こんな時間まで付き合わせて…二乃さん達のもあるのに」
「別に今日は無いから大丈夫だ。」
「優しいんだね。上杉君って。二乃さんから聞いてた通り」
「あいつなんて言ってたんだ？」
どうせろくな事では無い。
「えっと。面倒くさそうにしてるけど助けて欲しい時は助けてくれる優しい王子様見たいな人？」

「何故疑問形……。あいつ少女漫画見たいな奴信じてんのか」
「女の子はね、信じてるんだよ。白馬の王子様が現れることを」
「そんなのは夢物語だ。」
「そうかもしれないけどね…。」
ちらりと時計を見て
「帰ろっか。ありがとう分かりやすかったよ！
そしてまた…教えて貰っていいかな…？」
「あぁ。五人も六人も変わらないさ」
最初はオドオドしてる変な奴かと思ったが、意外とハキハキしているタイプだった。
そろそろ帰るかと鞄を持った時
「何故俺を待ってる？」
「もぉ～。一緒に帰ろうっていったじゃん！」
「言ったか…？」
「言った！はい！私と一緒に帰る！」
手を引きづられ、図書室を出る。
司書の人にお幸せに。と言われたが気にしない気にしない。
席替えで好きな女の子が隣の席に来たくらい気にしない。
これといって特に問題は無い…きっと

唯一の、問題と言ったら、その光景を五人に見られていた事だろうか。
でもそんな事は知らず、嬉しそうな顔をした女子に引きづられていた。

「へぇー、風太郎君私達を裏切るんだ～」
「フー君をアイツなんかに渡さないわ！」
「フータローは私達だけのモノ。あんな奴に渡さない」
「上杉さん。私怒りますよ？怒ると怖いですよ？殺しだってしちゃいますよ？」
「上杉君…彼は私たちの夫となるべき人ですので泥棒猫に取られる訳

には行きませんよ…」
「それじゃあ。風太郎君が浮気しないか調査しよう！」
「「「「おー！」」」」
「すみません…ここ図書室なので静かに…」
「「「「すみません」」」」
そこにはまるで魔界の様な雰囲気が漂っていた
さっきまで

次の日からさくらに勉強を教える事が多くなった
アイツらの家庭教師の無い日は勉強を教えた。
アイツらの以上に目に見えて点数上がっていくのがとてもやり甲斐を感じた。
そしてそれを嬉しそうに俺に報告を嬉しそうにするのも
「いつも教えて貰ってるのにお礼も出来なくてごめんね？」
「別にしたくてしてるんだから気にしなくていい。」
「それでもしたいの！」
「別に気にするな」
「嫌。あっ。じゃあさ、今度の日曜日一緒にお出かけしない？」
「うげ…」
日曜日には勉強をしようと思ってたのに
「何よ！その嫌そうな声は。ちょっとレディーに対して失礼じゃない？」
「だってお前ら女子の買い物って長いだろ？」
「来ないの？だったら二乃さん達に言っちゃうよ？」
「別にあいつらは俺に興味ないだろ」
「…それ本気で言ってる？」
「何かおかしな事言ったか？」
「確かにこれは手強いなぁ…二乃さんの言う通り」
「何か言ったか？」
「別に…少しくらい気持ちに気づいてくれてもいいじゃん。って」
「気持ち…？あぁ。そんなに買い物行きたいのか。仕方ない付き合っ

てやる。」
「えっ？本当!?やったー！」
　同時間　五姉妹は…
「今日も上杉君はあの人に教えてますね…
　ホント羨ましいくて妬ましいです。」
「あっ。フータローをデートに誘った。」
「これは浮気ですね～。間違いありません！この四葉の目は誤魔化せません！あいつに文句言ってきます！」
「待って！四葉。まだ風太郎君がＯＫするとは限らないでしょ？」
「あいつ…ＯＫしたわよ…」
「四葉いっきま～す！おぅ！」
「落ち着いて！四葉。それは違うキャラよ。ほら素数を数えて…」
「そうですね。素数…素数…
　素数って何でしたっけ？あはは～」
「素数とは確か３．１４１５９２６５３５８９…ではありませんか？」
「それは円周率。」
「ちょっとアイツを脅かしてやろうかしら…」

「今週の日曜日の９：００集合ね！絶対だからね！」
「はいはい…」
　でもアイツらの謎の束縛が厳しくなる…訳無いか…
　ここで携帯もとい最近はアイツらのＬＩＮＥ受信装置になった機械から着信音が鳴る
　するとＬＩＮＥでは無く、メールで
『アナタだけをずっと見つめている。
　　アナタの事は何でも知っている。
　　今女と話している事も。
　　彼女と勉強を殺っている事も』
　怖っ！ストーカーか？
　あと５時の精で彼女と勉強を殺してる事になるんだけど！

いやこれも誤字ったな。
５時の精って、何だろ？定時で帰るように勧めてくるのか？いいな、そんな精。
まだ学生だが。
周りを見渡しても誰も怪しい人影は見えない。
いたずらか…
それでもどっかで監視されてる見たいな感じがある。
自意識過剰か…
まぁ。いい
明日はアイツらだ

「お邪魔します。」
何回も入った玄関だが一応礼儀として言う
けどあれ…何か空気重くないか？
間違って魔王の城に来たのか？
リビングへの扉を開ける
Ｏｈ！阿修羅！
違った。五姉妹だ
「風太郎君どういう事かな？」
「フー君あんな奴といて」
「私達がいるのに浮気するの？」
「あいつは確か私と液体窒素早飲み対決で私を破った奴…」
「あの人と会わないでください！」
え？何で知ってるの？
あと四葉に至ってはお前なんで今も生きてるか心配何だけど…
「何で…お前ら知ってんだよ。」
「私達風太郎君の事だったら何でも知ってるの」
「そうですよ！よく言うじゃないですか！
下手な鉄砲和家（かずうち）渉（わたる）って」
「誰だよ！和家渉って。それを言うなら、数打ちゃ当たるだろ。この場にそぐわないことわざをありがとな！四葉」

「へへ～ん。そんな誉めないで下さいよ～垂れるじゃないですか、ヨダレが。しょうがないですね。結婚してあげます！」
「垂らすな！汚いな。せめて照れろ！あとお前の脳内ハッピーセットをどうにかしろ」
　袖をちょこんと引っ張っている感覚に気が付き見てみると犯人は三玖だった。
「フータロー。裏切るの？」
「裏切るって誰を？」
「私達」
「裏切るような事しないだろ」
「いっぱいしてるじゃないですか。」
「そうよ。あのさくらと仲良くお喋りをしていたじゃない」
「喋る位いいだろ…」
「ダメ。フータローは私たち以外の女の子と喋ったちゃダメ。分かる？めっ！」
「お前の考えがめっ！じゃないか？」
「裁判長。これは裏切りと言ってもいい差し支えないのでは！」
　二乃が一花に前の様に、裁判所風で
「判決。有罪！死刑」
「罪重いよ！初犯を考慮しろよ！」
「初犯を考慮して。だけど？
　と言いたいけど、ここは風太郎君が1週間ずつ私達一人一人と過ごしてくれれば許してあげなくもないよ？」
「それは無理だ。らいはがいる」
「らいはちゃんを脅迫（説得）したらＯＫだそうです！裁判長！」
　らいは。裏切ったなあいつ。
　その後更に束縛が厳しくなった事は言うまでもないだろう

ｉｆと最後と結婚

少年いや青年の上杉風太郎はタキシード姿で、荷物を確認している

「えっと。指輪は持ったな」
「お兄ちゃん！ティシュ忘れてる！　」
「いや。要らないだろ…」
「ゴチャゴチャ言わないで持っていく！」
無理矢理詰め込まれる
今日は俺が今まで家庭教師を務めてきた中野五姉妹の長女―中野一花との結婚式
何とかアイツらを卒業させた俺に待っていたのはあいつとの結婚だった。
アイツらのお父さん曰く
「卒業おめでとうそしてありがとう上杉君。
そして仕事が終わって早々何だかあの中の誰かと結婚してくれないか？」
「な、何を言ってるのやらさっぱり分かりませんが」
「君ほどの秀才が気づかない訳ないだろう？
きっといや絶対にあの子達は君の事を好意的に思ってる。だからあの中から１人選びたまえ。結婚式場やお金はこちらが負担しよう」
「え？それはどういう…」
「はぁ…惚けるのも大概にしたまえ。簡単に言うとあの中の１人と結婚してくれ。」
「えっ？」
「最近娘達が電話『君と結婚したいんだけど君が気づいてくれなくて、人目の付かない建物はないか？』とか、『人の記憶を変えられる薬や強力過ぎて１週間ずっと出来る見たいな媚薬はないか？』とかの電話が多くてね…」
「俺もう少しで死ぬとこだったんですね」
「だから１人と結婚してくれないか。という訳だ」

「考えてみます。」
「いい返事を待ってるよ。逆にしないと君は大変な目に会うよ。」
「骨に銘じておきます」
「せめて肝に銘じてくれ…」
　しかし、この事を五姉妹が聞き逃すはずも無く…
　ドーンという音と共にドアは倒れる
　…いや、ちゃんと開けろよ。ドアが可哀想だろ
「お姉さんと結婚するんだよね？ネェ？」
「私よね！なんたって風太郎の好きなタイプは料理上手なんだから！ワタシヨネ？」
「フータロー。私ダヨネ？」
「上っ杉さん！私ですよね！古事記にもそう書いてありますし！ソウデスヨネ？」
「上杉君。私ですよね？選ばないとタベチャイマスヨ？」
　こぇーよ！ハイライトさん仕事して！
　貴方に休日なんて無いんだからちゃんと社畜しろよ！
　あっ。隣でこいつらのお父さんも震えてるわ。
　怖いよね
「お父さん。ビビってますね？そりゃそうだ俺も怖いもん」
「ふぅ～。四葉。お前は何を言ってるんだ。お前との結婚の事なんて古事記には書いてねぇーよ。」
「書いてあります！上杉さんは四葉と結婚すれば吉と」
「…何だそのおみくじ見たいな書き方は。
　書いてねぇーよ」
「書いてないなら書いちゃいましょう！」
「やめろ。あとは五月お前はカニバリズムをする気か？」
「はい。そうすれば上杉君とずっと私から離れずにいるでしょう？」
「考えがこえーよ…」
「「「「さぁ！誰を選ぶんですか！」」」」
　そこで迷ってしまう。１番前に発表した異性のタイプに近いのは二乃だ。

けど、何でかな？恐怖を感じるんだ。
迷ってしまったことから間違いであった
「即答出来ないって事は、他に好きな人でもいるの？お姉さんに言ってみ？処理して上げるから♥昔からよく言うじゃん？隠し事と焼き鳥はバラすなって」
ハート着いてんのにこんなに怖いのは何でだ？
バグか？叩けば直る？
「聞いた事無いし、多分察するに意味真逆だけど大丈夫？」
「フータロー。好きな人いるの？ダレ？どのくらいの頻度で、どのくらいの時間でどこに行ったり物を食べたりした？
私を見てくれないとまた盗聴器仕掛けるよ？」
何でこいつ犯罪行為を堂々と言ってんだ
「マジ辞めてくれ…それは」
一時期三玖に盗聴器を仕掛けられ、大変な思いをした。
…もうね。あれは無理！
選択肢は1つ。逃げる！
間をすり抜け、出てどこかの部屋に素早くドアを開けて入る。
ふはは。いつもどれだけ早くドアを開け閉め出来るか練習してたのが功を奏した
「ほら！早く開けなさいよ！何でそんな逃げるのよ！あと何で変な事練習してるのよ。」
「命に危険が及んでるのに普通挑むか？」
「せっかく私達が好意を抱いてるんです。ちょっと位喜んでくれてもいいんじゃないんですか？」
「じゃあさ、俺が悪気なしで全力でお前らの顔殴っても喜べる？そゆこと」
「フータローだったら何されても構わない。
むしろナニされたい。」
「アウトだ！馬鹿野郎！」
「も～風太郎君は恥ずかしがり屋さんなんだから♪皆あれやろうか。」
あれ。とは何だろうか。

「いっくよー。３　２　１」
掛け声と共に大きな振動が起き、倒れた。
ドアが木っ端微塵になっている。
「もう観念しなよ～」

とまぁこんな感じで、結婚する事になった訳だが
今は結婚式や諸々も終わり、部屋でのんびりしている。
今は２人のいる家は、２人にしてはとても大きく、あと１０人は住めるだろう。
本当にデカく作りすぎだ。中野父
「ねぇ？私キレイだった？」
「あぁ。可愛いかったな。」
「もう風太郎君大好き！」
そのまま口付けをされ押し倒される。
「バカかお前は。今はダメだろ。」
「そうだね。」
といい、一花は自分のお腹をさする。
その中には新たな生命が宿っている。
無理やり襲われて出来た子供。
少し腹立たしいが子供に罪はなく、これからはしっかりと愛情を持って育てていきたいと思っている。
「結婚式疲れた～」
「まだまだそんなで疲れてたらダメだよ。
だってまだ

四人、残ってるでしょ？」
そう、結婚したのは一人では無い。五人だ。

重婚は認められていないはずだが、きっと中野父が手を回したのだろう。
怖いからね。しょうがないね。
そして…
「上杉さ～ん。いや風太郎さん！一花ばかりずるいですよ～私も構ってください！」
「フータローいや。あなた♥」
「フーくん。愛してるわ。ずっと」
「ふ、ふ、風太郎…さん。ちょっと恥ずかしいです／／／」
こいつら五人全員俺との子供がいる。
皆産まれたら、１１人家族か…多いな。
しかし最近は名前を考えるのが楽しい。と感じている
けど１番最初に生まれた子はらいはに付けてもらうと決めている。
いい名前がつきそうだ。
仕事は中野父のを少しずつ引き継ぎ、将来社長になる為日々努力をしている。
コネ見たいな感じで、折角今まで努力した勉強は使わなかったが、別に良いだろう。
結果が重要では無い。
確かに判断基準としてや、結果を気にして周りに負けないように努力をするのも大事な事だ。
けど俺は、それまでの過程が重要だと、考える。
俺はこんなに努力をした。こんなに出来た。
という自信に繋がるからだ。
これからもコツコツと、努力を積み重ねトップを走る。
それが俺―上杉…じゃなくて中野風太郎だから

三女と振りとデート

「私と恋人になって。」
アイツらの家に入り、リビングに行くと同時に、中野五姉妹三女の三玖からこんな事を言われる。
呆気に取られすぎていて出てきた言葉は…
「は？」
その一言だけ。
…あと寒くない？ここ。
まだ三月とは言え、まだ少し寒いよ？冷房付けるの早過ぎない？
エアコンを消そうと周りを見渡して見ると、残りの四姉妹が暗く澱んでいる目でこちらを見ていた。
そこら辺のホラゲーより怖い。
くるりと目をそっと背け、爆弾を落とした張本人に身体を向ける。
「何故だ？」
「ここのカフェ。歴史カフェなんだけど、恋人割引きとか色々特典あるから」
「友達と行け」
「フータロー以外と行きたくない。」
「ほら、四葉行ってこい。」
「そうですよ。三玖。上杉さんに迷惑を掛けてはいけませんよ？だから上杉さんは私の部屋に行きましょうか！そして運動（意味深）をしましょう！」
「俺は運動はやるより見る派だから…」
「う、上杉さんにそんな趣味が!?
確かに…上杉さんに1人で上杉さんの事を考えながらシている所を見られながらするのも良いかも…」
「趣味も何も見てる方が楽しいだろ。」
「じゃないと子供産めないじゃないですか！私は欲しいんです！上杉さんがハナレナイ様にする為に」
「子供？見てる時は離れねぇーよ。ずっと集中して見るわ！」

「う、上杉さん…そんな私に興味があるんですね…」
「は？」「え？」
ここで２人は話が噛み合ってない事に気づく
「いいんじゃない？私は賛成だよ？三玖と行ってくれれば？」
ここで一花が援護してくる。
そして三玖の傍に近寄り、耳元で
「私は寛容だから、夫を貸してあげる。
少し位の浮気は許してあげるの。
けど私の夫に何かしたら許さないからね？
半径３ｍ以内にチカヅクナ
これは脅しじゃないよ。警告だ」
何か一花が言い終わったと同時に三玖は、俺の腕に抱きついてくる。凄い勢いで
そしてまた一花に小さい声で
「大丈夫。ただ夫婦がデートするだけ。
何も問題は無い。一花こそ結婚してるとかの寝言は寝てから言うべき。」
暇なので二乃や五月を見ると２人は二乃の作ったクッキーを幸せそうに食べていた。
「それじゃ行こうか。フータロー」
「お、おい引っ張るな！」
＊
そんなこんなでそのカフェに連れてかれるんだが…
「フータロー。手を繋ごう？」
「別に今はカフェじゃないし、つな…「繋ごう？」…はい。」
あれ？こいつってこんなに怖かったっけ？
仕方なく手を繋ぐ事にする。
普通にらいはみたいにしているみたいにすると…
「ムッ！」
ムッ！とか言葉で言うやつ初めてみた。
そして俺が普通にしようとしている手を三玖は、手を絡め繋ぐ。

いわゆる恋人繋ぎ
「お、おい。これは流石に…」
「ダメ。じゃないと腕に抱きつく奴に変更するよ？あとこれでフータローは私のモノって周りに証明出来る。すると他の奴が寄ってこない。」
「辞めてくれ…」
後ろの方は聞こえなかったが、別にいいだろう
そんなこんなでカフェに着く。
「いらっしゃいでござる。上様、奥方様」
そのござるは少し無理がある様な…
心の中でツッコミをしていると、隣の三玖は
「奥方様…って事はフータローの奥さん…」
「あの～すいません。三玖…さん？」
「ふ、フータロー！子供沢山作って跡継ぎに困らないようにしようね！あと側室はダメ。」
「何の話だ…」
店員…もとい家臣に席を案内してもらう。
そして座り、メニューを眺める。
高ぇ…
見てみると
・「戦国時代コーヒー」
・「戦国時代ケーキ」
・「戦国時代お子様セット」
・「戦国時代サンドイッチ」
・「戦国時代フレンチトースト」
等が有る。
ほとんど洋風じゃねーか！
戦国時代って言葉がつけばいいって訳じゃねーだろ！
三玖は注文が決まった様でボタンを押す
まだ俺決めてないよ!?
「すいません。このカップル限定メニュー下さい。」

は？
「おいおい…ちょっと待て…」
「承ったでござる。それで恐縮なのでござるが…恋人の印と言うものを見せて欲しいでござる。」
「恋人の印？」
「へぇ。例えば接吻や抱き締める等でござる。」
「じゃ、じゃあ接吻にする。」
「ふざけんな！ハグに決まっ…」
言いかける途中で、口を塞がれる。
そして目の前に三玖の顔
困惑してると口の中に何か蠢くものが入り、口の中を蹂躙していく
急いで顔を離すと、三玖は少し物足りない顔をしていたが知らん
「はっ！これで2人は恋人と証明されたでござる。中々お熱い事で…美男美女のカップルでござるなぁ…」
「ご注文！カップル限定メニューでござる！」
大きな声で注文を繰り返す。
しかしそんなのは関係ない程固まっていた。

＼承ったでござる！／
＼承ったでござる！／
＼承ったでござる！／
＼承ったでヌベスラスッチョ！／
おい待て、独特な語尾の奴いたぞ。
ふぅ～。おかげで冷静になった。

「フータロー？どうしたヌベスラスッチョ」
「語尾移るな！」
「フータロー？どうしたの？」
「何であんなことを？」
「割引きになるから。あとフータローとキスが出来るから」
また最後の方聞こえない。

もっと大きな声で喋ってくれない？
「何て言った？」
「フータロー知ってる？上杉謙信の信仰している毘沙門天って何の神様なのか」
「話を変えるな。」
「いいから、」
「謙信が信仰してるなら何か戦いの神様か？」
「ブブー。正解は…
無病息災の神様だよ。室町時代には七福神の1人として数えられていたの。」
「へぇ～」
そして話していると頼んだ物がくる。
1つのジュースにストローが2つの奴
1つの皿のオムライス。
ひとつしか無いスプーン
オムライスには大きなハートマーク
…やっぱこの店、戦国時代要素ゼロだわ。
「はい。フータローあ～ん」
こちらに差し出してくる。
「おい。1人で食べられるから…」
「だけどスプーンひとつしか無いよ？」
「店員さんに貰うから」
「メニューに『恋人メニューを頼んだのにスプーンをもう1つ貰ったお客様は、ヌベスラスッチョの刑にします』って書いてあるよ？」
「怖っ！
どんな刑か分からないのが、より一層怖っ！」
「しょうが無い…」
仕方なく差し出されているものを食べるとしよう。
…意外と美味い。
「次は私にお願い。」
「はいはい…」

仕方なくオムライスをのせて差し出す。
すると凄い勢いで食いついてくる。
「お腹空いてたのか？」
「しょう。しょうなほと～」
訳：そう。そんな事～
「スプーンを咥えながら喋るな。スプーンを、舐めるな！」
＊
「楽しかったね。フータロー」
「俺は疲れた…」
色々な試練を乗り越え、やっと帰る事ができる…
「それじゃ家に戻ろうか。」
「あぁ。じゃあな」
「え？フータロー私の家。だよ？」
それと同時に三玖に引きづられる様に連れていかれた。
「着いたよ。ただいま」
あいつらの家に入ると、凄い勢いでこちらに来て
「風太郎君大丈夫だった!?何もされてない？まだ風太郎君チェリーボーイ？」
「上杉！ここにクッキーあるのだけど食べる？ちょっと身体動かなくなるけどいいスパイスが効いていて美味しいわよ？」
「上杉さん!?大丈夫でしたか！確認する為に私の部屋に行きましょう。そうしましょう！」
「こ、これ食べますか？私の血が入ってるんです。これでひとつになりましょうか」
「うるさい！うるさい！いっぺんに喋るな！」
「フータロー。今日は楽しかったね。
あんなに積極的に私にイロイロして来て。
私と…フータローがひとつになれて…
楽しい家庭を築いて行こうね」
「おい、改ざんするな！」
「へぇ～ドウイウコトカナ？」

「ちゃんと」
「説明して」
「貰えます」
「か？」

「えっと…あの…ヌベスラスッチョ！」

ドキッ☆ヤンデレだらけの大運動会！

小鳥もさえずっている程の爽やかな朝
普通は休みの日土曜日
しかし布団に包まっている少年がいる
「おにーちゃん！そろそろ朝ごはん食べて学校行かないと遅刻するよ！」
「らいは…今日は休む。」
「今日は体育祭でしょ！行かないとダメだよ！あと高校最後の体育祭なんだからね！」
布団を引き剥がし、無理やり、らいはが行かせようとする
「ちょっと待て！今日はちょっと体調が…」
「え？何？お兄ちゃん」
「あの…ちょっと爪の体調が悪くて…」
「爪に体調何て無いから大丈夫！」
／ピンポーン／
「は～い」
とたとたと玄関に走っていくらいは
「誰だこんな朝っぱらから…
迷惑だってんだ」
「そうでもしないと上杉君は来てくれないでしょう？」
…イヤな声。何回も聞いた声
声のした方へ顔を向けると…
「犯人はお前か五月」
「他に四人もいますけどね」
「あいつらも居るのか…」
「五月さ～ん！来てくれたんですね！」
「え、ええ。らいはちゃんに会いたかったですから」
「うげ…」
「私も居ますよ！」
「四葉…」

「私も」
「三玖…」
「やっほー。」
「一花…」
「早く起きなさいよね！」
「二乃…何でお前らが居るんだよ！」
「何故ってこうでもしないと来ないでしょ？」
「ほら。行きますよ！」
「まだ準備してないからなー。今からしたら遅れちゃうからなー。行かなくてもいいかなー（棒読み）」
「それなら安心してお兄ちゃん！私が昨日ちゃんとやって置いたから！」
らいは…お前はお兄ちゃんを裏切るのか…
そのまま引きづられるまま、無理矢理行かされた
＊
「まずは校長の挨拶です」
出たよ…校長の長い話。
クソ暑い中長々と話すのは辞めろ
「おはよう！皆さん！東西南北、老若男女、焼肉定食全国から強者を求め…」
焼肉定食は四字熟語じゃねーよ。
あと学校の体育祭ごときで全国行くなよ…
「北は北海道、南は青森から」
せめぇ！
「全国から強者を求め」
ちゃんと全国行けや！
「腹は満ちた…あっ。間違えた時は満ちた…」
焼肉定食食ってるからだろ。
「ここに体育祭の開始を宣言す！」
ウォォ！と生徒達が雄叫びを上げ、場はとても盛り上がっている
いつの間にツッコミをしてしまっている！

…もうツッコミ疲れたよ
「どう?風太郎君。体育祭もいいでしょ?」
「ツッコミ所が満載なんだよ!」
最初は、男子の借り物競走です
ここでアナウンスが響く
「一花、俺行きたくない。保健室に行ってるわ」
「だ~め。ほらちゃんと参加しないと!」
「そうだよ。上杉君」
髪をかきあげながら近づいてくる奴が
「忘れたのかい?この僕を」
「覚えてるぞ。えっと確か…
佐藤」
「違う」
「伊藤」
「違う」
「齋藤」
「多い苗字で当てずっぽうでやろうとするのは辞めてね。武田だよ。」
「居たか?そんな奴」
「いつも君に負けて学年2位の武田だよ」
「2位以下には興味ないから知らないな」
「ほう。それでは借り物競走で勝負をしようじゃないか!」
「嫌だ。面倒臭い。何故俺がそんな事をしなければならない」
「だろうと思ったよ。だから勝った方は言う事を1つ聞くと言うのはどうだい?」
まぁ…それなら。近づくなって言えばいいか
話していると丁度俺達の番みたいだ
バァン!と音がなり一斉に走り出す。
勿論俺は全力疾走だかビリだ。
机には紙が置いてあり、それに合った物を持ってくるというルール
もう引いている奴いるな
「なんだよ!通帳の暗証番号って絶対無理だろ!」

「俺、ホワイトシチュー煮込み牛乳ベイクド釜飯だぜ？」
「お前どんだゲテモノだよｗ」
「大丈夫じゃね？だって絵の具全部混ぜるとレインボーじゃん？」
「それお前真っ黒になるわｗ」
「あ？マック？（難聴）」
「俺ひもＱ！」
「俺、ブルーアイズホワイトドラゴン」
「俺の奴のヌベスラスッチョって何!?」
…変なの多くないか？
俺が引いたのは！

『好きな人』

……

知らんぷりして戻すか
「上杉選手！入れ替えは認められていません！それに従ってください！」
は？やだよ。
だって
「風太郎君引いてくれたかな？私だよね♪
私しか居ないもんね！」
「一花何言ってんの？私よ。きっと私を選んでくれる！」
「フータロー…選んでくれるかな…？」
「上杉さん！四葉はここです！ここに居ますよ！」
「わ、私は別に期待はしてませんから」

さっきからさ

すっごい期待の視線をアイツらが向けてくるんだよ
あと何で俺引いたのを知ってるんだよ

「もしかして風太郎君他の人選ぼうとしてる？ダメだよ。穢れちゃうじゃん。」
「惚れ薬仕込んでやろうかしら？」
「フータロー、やっぱり盗聴器と発信機付けないと。私が守らないと行けない　」
「上杉…さん？私ですよね？」
「お腹が空きました」
　すっごいあそこだけ空気が違うんだよ。
　重い。ボス戦くらい重い。水素より重い
　五月は平常運転
　しかしどうするか？
　好きな人なんて居るはずもないし、あいつらから選ぶとしても、他の四人から色々されて
監禁（BAD）ＥＮＤだ。
　はっ！らいは来てるかもしれないから、らいはにすればいいんだ！
　観客を見渡して、妹を探す
　…身体を突き刺す様な鋭い五つの視線を無視して
「らいは！行こうぜ！」
「何で？」
「家族って出たから」
　嘘を言って誤魔化す
「もぉ～しょうがないな～お兄ちゃんってば♪」
　手を取り、ゴール地点へと向かう
「らいはちゃんを選びましたよ！上杉さん」
「あちゃ～らいはちゃんも抹殺しないとダメかな～」
「フータロー謙信みたい…」
　※上杉謙信はめっちゃシスコン
　姉に宛てた手紙がめっちゃ残ってる
　ちなみに他には今の山梨県（多分）の真田幸村（信繁）や山形県の最上義光など…
　あとこの説明が居るか分からなすぎて、夜めっちゃ快眠

「おっと！ここで風太郎選手がゴールに向けて走り出す！けど遅い！遅すぎる！」
うるせぇよ。お前は後で膝下セメントの刑な
「ここで武田選手もゴールに向けて走り出す！カッコイイ！カッコよすぎる！誰かとは大違いだッ！」
実況を聞いて隣を見ると確かに佐藤がいた
「だから武田だよ…」
「羽柴秀長の城？」
「それは竹田…」
「シャケだぁぁぁぁぁぁぁ！」
「それは日常」
「タダクニは5のダメージを受けた」
「それは男子高校生の方」
「そうじゃよ」
いきなり違う声が聞こえた為ビックリして、周りを見てみると、加藤の背中に何か居る
「お前誰だそれ」
須藤が背負っていたのは、見た目５０代くらいのおじさん。
頭がキラキラしてやがる…
「あぁ…僕のお題が『北の偉い人』だから、北高校の教頭先生を持ってきたんだ。
あと僕の名前は武田」
「アホだな。お前」
「まあ。先に行かせて貰うよ！この勝負は貰った！」
スピードのギアを上げ、加速して過ぎ去っていく武藤
やば。そう言えばこれ勝負だった…
しかし追いつく訳も無く…
「1位！武田選手！しかし教頭先生持ってくるなら校長を出せという抗議により無効！」
あ…勝ったわ
という事で1位になってしまった…

「風太郎君おめでとう」
「さすが私の夫ね♪」
「フータロー。かっこよかった」
「やりましたね！上杉さん！略してやり杉さん！」
「まぁ…その…頑張りましたね　」
「もう運動なんてしない…俺には必要ない…
　ツッコミ疲れたしもうしない…」
「上杉さん！勉強は九九が出来れば生きていけますよ？」
「言ったな？なら７×６」
「え？あっあ…あの…ちょっと…それはですね…６９！」
「ＯＫお前の生きる権利剥奪されたから　」
「もう１回だけチャンスを下さい…」
「６×７」
「４４！」
「４４？」
「４４．５６！」
「九九に謝ってこい！」
「そして私を養ってくれるんですね！　」
「しないからな…」
「竹刀ですか？」
「シナイの漢字が違う」
「別にどっちでもいいじゃないですか！」
「同音異義語って知ってるか？」
「童貞維持ンゴ？」
「ちゃんと耳ついてるか？」
「パンの耳は先に取って食べるタイプですが？」
「んな事聞いてないから」
「♪～届けて～切なさには～」
「急に歌い出すな怖いわ！」
「名前を～付けようか～」
「Ｓｎｏｗ　ｅｌｅｃｔｉｏｎ（雪選挙）」

「Ｓｎｏｗ　ｈａｌａｔｉｏｎだ２度間違えるな。
ってか雪選挙とか１０年日本人やっている俺ですら聞いたことないぞ…」
「名前を～付け四葉！」
「やかましい…」
その後は差し障りのなく、終わった。
別にこの後の競技が思いつかなかったとか、
めんどくさいな。と思った訳ではない。
強いて言うなら四葉が、四葉無双を繰り広げて居たくらいか
「今回の最優秀選手は～！」
多分四葉だな
「上杉選手！登壇してください！」
え？俺？違うだろ
まぁいいか…
「上杉風太郎選手には嫌がら…景品として、スマホスタンド１年分が贈呈されます！」
「おい。嫌がらせって言わなかったか？要らねぇよ。スマホスタンド１年分とかどれだけだよ！」
「４００個以上ですが？」
「何で１日１個壊す計算なんだよ！赤ちゃんか！」
「…そのツッコミはよく分からない」

帰宅後
「お兄ちゃん。楽しかったでしょ？」
「もう体育祭はいいや…」

五人と海と最後　前編

どこまでも広がる青空
底まで見える綺麗な海
そして水着姿の美女五人
…待ってくれ。男子諸君。俺が誘った訳では無い。だから、イタッ！俺に、イタッ！パンについてる青い奴とか、イタッ！お店にあるレシート入れる奴を投げないでくれ！
「…何なんですか。その分かるけど名前は分からないシリーズは　」
五月に突っ込みを入れられる
「ちなみにパンについてる青い奴は、バッググロージャーって言うらしいぞ。」
「へぇ～。物知りですね。誰に聞いたんです？」
「Ｇｏｏｇｌｅ（友達）」
「…知ってました。」
今はこいつらに拉致られて海に来させられている。
水着に勝手に着替えさせられて。
「四葉。どうしてこうなったか説明してくれ」
「わかりました！こんな事もあろうかと作ってきました！題して！」
私（四葉）でも分かる！
今回のちらし寿司～
「よし、突っ込みたい所は２つあるがひとつずつにするか。」
「まずひとつ。今回のちらし寿司って料理番組か！何が言いたいのか全然伝わらんぞ！」
「今回のあらすじって書こうと思ったんですが面白さに欠けるので」
「そもそもとして今回のあらすじとか斬新すぎるんだよ…」
「それでは続けますね。
これは分かりやすいです！
その証拠にアンケートで、『理解出来ましたか？』と聞いた所…」
「主語入れないと分からないだろ。」
「９０パーセントの人が

『え？もう1回質問をお願いできますか？』と返答されました」
「困惑してるじゃねーか！」
「その後、四十八時間以内に全員の死が確認されました。」
「何で最後ホラー要素入れた…デス〇ートか」
「大丈夫ですか？上杉さん着いてこれてます？」
「着いてこれてないけどまぁいいや」
「1！上杉さんと海行きたいなー
2！上杉さん誘おっか！
3！でも上杉さん来ないよねー
4！どうしよっかなあ
5！なら拉致すればいいじゃん！
って感じなんですが分かって貰えましたか？
あと五姉妹らしく五つにまとめてみました！」
「分かってないけど分かった。俺は帰る」
「いいんですか～？私達の水着姿見なくて～」
四葉は自分の来ている水着を目立たせるように立派に胸を張る
水着の描写しろって？
個人個人でこんな水着着るだろっていう脳内補完でもしてくれ。
俺にその能力はない。俺は気づいてしまった。
描写が苦手なら脳内補完に任せようと。
「…風太郎君それただ諦めただけじゃ…」
「フータロー、似合ってる？」
三玖も水着を見せてくる
「あぁ。似合ってる。可愛いと思うぞ」
その水着が。
そう言うと彼女は顔を真っ赤にして
「フータロー。って事は襲っていい？いいよね！そして明るい家庭を築いていこうね！
でも浮気したらダメ。私だけを見て、私だけを愛して、約束。約束破ったら盟神探湯（くがたち）にする。」
※探湯（くかへ）釜という釜で沸かした熱湯の中に手を入れさせ、正しい者は

火傷せず、罪のある者は大火傷を負うとされる。毒蛇を入れた壷に手を入れさせ、正しい者は無事であるという裁判の１種の基準。昔の日本で行われていた
「…なんだその微妙な脅し方は」
「さぁ！今日はいっぱい遊びますよー！
　上杉さん！行きましょうぉ！このラブ探偵四葉がＩＱ３でも任せなさ―い！上杉さんを楽しいさせますよ！」
「踊りだしそうだな。それ。俺はここで勉強してるからお前らで遊んでこい。」
「それじゃあ、つまらないじゃないですかー」
「そうだよ。風太郎君。お姉さんといい事して遊ぼ？あそこの岩陰とか誰にも見られないしイ・ロ・イ・ロ出来るよ？」
　胸の水着を少しずらし誘惑してくる。
　思わず目が釘付けになってしまう。
　しょうがないね。一応俺も男だし
　しかし、それを悟られたらどんな目に合うか
　ポーカーフェイスだ。
「いいからお前達は遊んでこい。五月なんかもう海の家に食べに行ったぞ。
　俺は後で行く」
「えっ!?五月ちゃん早いよ…」
「さすがね…五月」
「絶対来てくださいね！待ってますから！じゃないと一生お日様の光を浴びれない所で一緒に過ごす事になりますよ？」
　あれ？海で命の危機に陥るっけ…？
　３人はビーチボールや浮き輪その他様々な物を持って海にかけて行く
　…あれ？１人足りなくないか？
　あのリボンは四葉
　そして髪が短いあいつは一花
　そして何かツンデレになってるのが二乃

五月は海の家
三玖は？
「ここ。」
身体、詳しく言えば胸の辺りに重さを感じる。そしてそこから伝わる柔らかく、安心出来るような温かさ
…三玖が胸に抱き着いていた。
そしてスンスンと匂いを嗅ぎ、ムハァ…と女子がしては行けないような幸せな表情
「お前は猫か」
「に、にゃん」
手を猫の手にし、顔を赤く染めながら言う彼女にドキリとしてしまった。
俺は変態じゃない。俺は変態じゃない。
言い聞かせる様に自分にいい聞かせ、落ち着く
「やめろ、猫じゃらしで殴るぞ」
「ふぁさってなって終わりでしょ」
落ち着け…こんな時は周りを見て落ち着くんだ…
「ブックオフなのに本ねえじゃんｗｗｗ」
「だってここハードオフだし、」
「違ぇよ。海だよ。」
何でブックオフのＣＭの心くん見たいな事言ってるんだ。こいつらは
ここで読者さん参加企画
皆で「ブックオフなのに本ねえじゃんｗｗｗ」
と言おう。
「フータロー。大丈夫？」
「突発的に思いついて、徐々に後悔し始めて、消そうか悩んでる俺の為に早くしてくれ。」
行くよー！
３
２

1

って言ったらするんだよ？

…ごめんなさい。だから鉛筆削り投げないで

「一体何を持っている設定なの…？」

行くよー！せーの！

「ブックオフなのに本ねえじゃんｗｗｗ」

ありがとうございます。これを電車や家の中でやった君は周りの人から変な目で見られる事間違いなし！

新学期を変な目で見られながら過ごして下さい

ツイキャスとかでするときっとより一層腹立つと思う。

「っは！」

「どうしたの？フータロー？元に戻った？」

「皆と何か言った所から記憶が…」

「そこまで記憶あったの…」

「そろそろ上杉さんも来てくださいよー！」

「はいはい…　」

絶賛ビーチボール中の四葉から声を掛けられる

「飲み物買ってくるから待っててくれ」

やる訳無いだろ。逃げさせてもらうに限る

五人と海と最後　後編

「どーも！四葉です！後編なんですがここで頂いたメッセージを最後なので読ませてもらおうと思います！上杉さんはどっか言ったので私と三玖でお届けします！」
「まず！北海道カリフォルニア州在住T氏からのお便りです！」
「北海道にカリフォルニア州は無いよ」
「これを読んだら宝くじ1等当選しました！だそうです」
「そして次！水戸県茨城市在住、蘇我氏です！」
「県名と県庁名が逆。どこの世界線の人？
　あと匿名性維持しないと中臣鎌足とかに殺されるよ…？」
「これを読んだら弓や刀から守ってくれたそうです。だから乙巴の変が亡くなったそうです！」
「以上お便りありがとうございます！勿論でっち上げですが、最後までこのシリーズをよろしくお願いします！」
　そして本編へ～

　そして抜け出し、飲み物を買いまた知らんぷりして傍で勉強でもしてようと思い戻る時に
「ねぇー？君1人？」
　ギャルみたいな奴に絡まれた。
「見れば分かりませんか？」
「そ、そうなんだけど、あのさお姉さんと一緒に遊ばない？」
　あいつらよりは小さいが、普通の目で見ればよく育っている胸、そしてしっかりとしまっているくびれ
「ごめんなさい。失礼します。」
　どっか行くに限る
「いいじゃん！お姉さん達と楽しい事いっぱいしようよ！私結構君タイプだから」
　腕にぎゅっと抱きついてくるギャル
　腕に柔らかく、温かい感触

そして上から見える谷間
フッ。俺も舐められたものだ。
あいつらからどんだけ誘惑されたと思っている
だから…チラッ。この人の…チラッ。誘惑にぃ…チラッ。負ける
訳には…チラッ
あれ？何でかな？胸に目が言っちゃうんだ…
そして何処からかとてつもない殺気を感じるんだ
バンッ！自分にぶつかるまであと１ｃｍと言った所にビーチボー
ルらしき物が…
そう。バウンドしたと思ったら割れた
どんな馬鹿力だ…
「上杉さん遅いな…と思ったらこんな所で油を売ってたんですか～。
あっ。上杉さん。虫で
も捕まえてたんですか？そこの雌を」
壊れた機械の様に振り向くと…
目は暗く淀み、虚ろな目になり、
身体には覇王色の覇気みたいなオーラを纏った四葉
「行きましょう…？上杉さん？」
笑顔の四葉。
けど笑顔ってこんなに恐怖与えるっけ？
「カノジョがいるんですからダメですよ？
浮気したら」
「浮気なんてしてないですよ。俺がしたのは浮き輪位で…」
そしてそのまま引きづられて元にいた場所に
「遅いわよ！」
二乃に怒られる。怖っ！
「ほら、早くやるわよ！私とペアよ。」
「違うよ。二乃。お姉さんと組むんだもんねー？」
「上杉さんは運動苦手なんですから私がサポートしますよ！」
そこから３人で争い合っていた。
そしてジャンケンで二乃になった

「行くわよ！
　は〜い、顎を少し引いて右肩もうちょい上げてニッコリ笑って、はい、チーズ」
「サーブを打とうとしながらシャッターチャンスも狙ってるんじゃねぇよ！」
「因みになんの写真撮ろうとしてたんだ？」
「え……自撮り…」
「すげぇな自撮りであんなに盛り上がれるのって二乃とカナブン位だぞ」
「なんでカナブンが自撮りを知っているのよ…」
　そして四葉も…
「私はここで勝って草むらの覇王の称号を得るんです！」
「草むら要素全然ないですやん…ってかスケール小さすぎだろ！
　何が楽しくて草むらに覇を唱えたんだよ！」
「そして覇王に抗う憐れな上杉さんと二乃に制裁を下します！」
「お前あれだからな。覇王だけ切り取ったら、一見強そうだけど、所詮草むらの覇王だからな！」
「のんのんのん。ナンセンスです。上杉さん
　たかが草むらと言えどそれが集まって大きくなったらどうでしょう？」
「バカお前。大きい草むらなんてただの大草原だからな！」
　wwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww
wwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww
wwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwwww
「文に草を生やさないで下さい」
　結果？勿論四葉の勝ちだよ。
　そして今は中野家（父）専属の運転手である江畑さんに送ってもらっている。
　そして四葉は俺の膝で眠ってしまっている。
疲れたんだろう…

「くぅ～すぅ～。」
寝息を立てながら。
「くぅ～すぅ～。泡盛は古酒（クースー）」
「寝てる時にまでネタを仕込むな！」
実は起きていたりしないだろうか？
そして江畑さんの運転の車に揺られながら、勝手に6人分取られていた宿に向かっていく…
五人に襲われたのはまた別の機会に…

本編

五つの歪んだ愛の形　プロローグ

やぁ。初めまして俺は上杉風太郎だ。
いつもは赤点常習犯の五つ子を卒業させ、俺の家の借金を無くすため五つ子の家庭教師をやっている。
ここで俺の状態を振り返ろうか
椅子に座っていて手と足は縛られている。
逃げたいが、縛られているし体力無いから運動バカの四葉にすぐ捕まるな。アッハッハッ
まぁ。その五つ子が俺の周りを囲むようにいるから変な動きをしよう者なら直ぐに押さえられる。
「一花」
「何？フータロー君？」
「出してくれ。俺が何したって言うんだ。」
「ダメ！ここでおねーさんと一緒に過ごそう？楽しいよ？きっと。私はフータロー君が居てくれるだけで楽しいし。一緒にイイコトしよ？」
ダメだ。頭がバグってる。次
「二乃。出せ。」
「何で私には、丁寧じゃないのよ。勿論出す訳ないじゃない。私は貴方に告白したのよ？せっかく何してもバレないここにいるからには色々したいじゃない？」
「そう言えばそんな事もあったな。」
こいつもダメだ。次
「三玖。出してくれ」
「ダメ。フータローには、ここにいてもらう。
ねぇ。フータロー。知ってる？戦国時代。躑躅ケ崎館（つつじがさきやかた）に本拠地を移した武田晴信はこういったんだよ
人は城

人は石垣
人は食料　って　」
「それだとめっちゃ大飢饉に襲われてるからな！天下狙う前に自国の食糧難をどうにかしろよ。
そんで？関連性は？」
「……」
「……」
「…今から考えるから待ってて」
「あっこれ関連性無いわ…」
こいつもダメ。次
「四葉。出してくれ」
「別にいいじゃないですか。上杉さん♪ここで私と遊びましょ～よ～」
うん。ある意味いつも通りだ。次
「五月。出してくれ」
五つ子の中でも1番の常識人であろう五月に最後の助けを求める。
頼む！出してくれ。　早く勉強がしたいんだ！
お前らのせいで、時間が無いんだよ…
「別にいいじゃないですか。上杉君。ここで貴方は一生過ごすんです。私達もいます。別に心配することはありません」
こいつもダメか…
ん？
「ここで一生過ごすと言ったな？それだと俺はとても困るんだ！らいはも待ってるし、俺はお前らを卒業させるために家庭教師をやってるんだ。だから困る。」
「フータロー。私達いっぱい働いた。お金いっぱいある。お父さんにもお金もらったし大丈夫。」グッ！
「おい。三玖。お前らが働いてお金を稼いだのは偉い。けどそれは自分達の為に趣味等に使うべきだ。
情けをかけられる覚えはない！」
「大丈夫です！上杉さん！これが私達の為に使っているんですから

！」
くそ！早く逃げないと何されるか分からない！
早く外さないと。
必死に手を動かしていると少しずつ緩んできて取れた。
けど悟られてはならない。
「あっー！あんな所にいいのがあるぞー！何だろなー（棒読み）」
５人一斉に指を差した方へ向く。
今だ！
出口目掛けてダッシュする。
頼む。体力持ってくれ…

…もう１つ問題が発生した。
俺こいつらの中で１番足の遅い三玖と同じ速さだった。
だからさ。
「う～え～す～ぎ～さん。何処に行くんですか！四葉からは逃げられないですよ！」
追いつかれるよね。
俺と並走している四葉
あぁ。もう体力が持たない…
ドサッと倒れた
その後の記憶はない
襟をしゃぶる様な音が聞こえたのは気の所為だ。
うん。きっとそうだ。

長女とデートと愛

今日は彼—風太郎君と映画を見に行く約束をした。
私の出た映画を見に行く約束
私としては、男友達と遊びに行く感覚で軽く誘ったのだが思ったより恥ずかしく、顔から火が出る。とか緊張で心臓が口から出そうになる。を比喩では無く本当になるかと思ったほどだ。
ここまで深く深く愛しているが、振り向いてくれない
自分の妹がライバルだ。
いくら姉としても譲る訳にはいかないのだ
それでも問題は彼自身
誘うとしたら取って付けたような理由で断ろうとしたのだ！
いや…それを見越してカップル招待券貰って来たんだけどさ…
彼は鈍すぎる！だから今日で私を1人の女として。彼に好意を抱いている私を嫌でも知ってもらおうとお出かけをする事にした。
後で「これ。デートじゃん！」と気づいて布団の中で悶えてたのは秘密
こんなに好きなのに気づかずにもっと好きにさせようとしてくる風太郎君は罪な男だ

＊　＊　＊

最近よく一花が俺に絡んでくるようになった。
何故だ？俺には分からない
俺の事が好きなのか？
フッ。下らない。勉強に恋愛は必要ない
そもそも一花が俺の事を好きなどとは自意識過剰だろう。
クラスでちょっとの事で自分の事を好きだと勘違いして告白し振られている人を見てきた。
それを見れば一目瞭然だ
最近は一花に頼りすぎている気がする
焼肉抜き焼肉定食では心配だ。

という事で弁当を作っていてたり、よく出掛けようと声をかけてくれたり
なんと言うか…長女として性なのか？
弁当は二乃が作ってる筈だし

＊　＊　＊

彼に自分の好意を知ってもらう為
色々こちらからアプローチをかけたりした。
胸を押し付けたり、手を繋いだり、腕を組んだり
フフっ。胸を押し付けた時の風太郎君の表情可愛かったなぁ…
意識を私に向ける為私の出てる恋愛映画を見たり、デートスポットに行ったり
でも風太郎君は、映画の方は
「お前。あんま出てないじゃん。主役出来るようになってから俺に見せろよ。」
と酷評だったり
デートスポットでは
「恋人なんざはこの世で最も要らないもののひとつだ！何故一緒にいるとストレスが溜まる相手といなければならない！」
とか色々と失敗に終わった。
けどそれはちょっと言葉は厳しいけれど、彼なりのエールだという事を私は知っている。
彼は厳しそうに見えるけど、いざと言う時は私達を助けてくれる。
何か問題がある時は、一緒に解決してくれる。そんな優しい人だ。
だから私たち姉妹は彼に惹かれる。
ちょっと三玖と距離が近いのは許せないけど…
その時私は仕事をもっと頑張ろうと決意した。
それこそ1人ぐらい養える程に…

始まりは普通の恋だった。
それが様々な要因でその愛は捻れていくことになる。何故なら
長女のその男性に向ける愛は深すぎるからだ…

中野一花編スタート

長女と仕事と愛

今日もいつも通り５つ子の家に行き家庭教師をする時間が来た。
「今日も一花は休みか…学生の本分は勉強だろ。」
「多分勉強楽しくやってるのって上杉さんくらいだと思いますよ…」
うんうん。と他の３人も四葉の言葉を肯定する
「私はまだ勉強嫌い。フータロー以外だったら勉強やりたくない。」
「わ、私は仕方なくよ！泣かれても困るからね！」
「その位で泣くとか俺お前の中でどんなイメージなのか聞きたいよ…」
「わ、私は上杉君から教わった方が効率的だと思っただけですから」
「はいはい……」
最近、一花は仕事頑張ってこなしているようだ
そのおかげが直ぐに死ぬ役では無く、サブヒロイン等も出来るようになっているらしい。
ちなみにメインヒロインの役も回ってきたそうだ。
「じゃあやるぞ。」
「二乃。このＴｏはな名詞的用法の奴だ。後は分かるな？」
「三玖。西南戦争は１８７７年だ。１８７７西南戦争（嫌な内乱）で覚えるといい。
ちなみに西郷隆盛の肖像画は弟と従兄弟の合成写真と言うことは有名だよな」
「四葉。とにかく国語は語彙力が必要だ。作文書く時とか問題によく～～の代わりに書いてているのを探せって言う問題あるだろ？」
「五月。ボールは自由落下する時の速度はマイナスになるんだ。速度や加速度は上向きを正としていることに注意してやってみてくれ」
「先生！何で私の国語だけ大雑把に教えたんですか！後私は四葉では無いです！」
「嘘だろ！」
「はい！嘘です！さっきのは上段の構えって奴です！」
「舌引っこ抜くぞてめぇ…」

疲れる…
アイツらの勉強は疲れる。
基本的な事から教えないと行けない為どうしても時間がかかってしまう。
だから応用問題にかける時間が少なくなる
「フータロー。今度武将の展覧会あるけど行こう。今度の日曜日ね」
「何も言ってないのに決めるなよ…」
「それじゃあ。バイバイフータロー。」
帰り道これからの予定を立てながら歩き、ふと顔を上げると
一花の出てるドラマの宣伝が出ていた。
主役クラスで出来るようになって行き、今はドラマやバラエティーに引っ張りだこのようだ。
…ドラマやバラエティーは見ないので詳しくは知らないが
「あいつは頑張ってるんだよな。」
そう勉強とは違うといえ彼女も頑張っている。
俺も頑張らないと行けない。
きっと何か欲しいものでもあるんだろうな

土曜日
また一花に呼び出され集合場所で待ってることにした。
約束の時間の三十分後
やっと目的の人物か来た
「ごめ~ん。待った?」
「あぁ。超待ったわ。遅いぞ」
「そこは待ってないよ。って言わないと!」
「何故嘘をつく必要がある?」
「いいや。風太郎君には女心は分からないか…さぁ!行こう
あっ!忘れる所だった!はい。チョコレート」
「ありがとうな」
「風太郎君って女の子にチョコ貰った事ある?」

「あるぞ！」
　妹にな
「妹だけかー。　」
「なっ！何故分かった!?い、いや貰った事はあるぞ多分…」
「ラブレター入のチョコ貰ってそこから付き合ったけど周りに囃されるのが嫌だから皆に内緒で付き合ってたらその数ヶ月後に友達に盗られたの？」
「イヤっ。それは作者の実話ァァ!!何故知ってる!?」
「フフー。なんでも知ってるよ。風太郎君の事はね？」
「俺自身じゃなくて作者にも飛び火してたけどな」

　その後は、前に比べ主役に近づいたり、主役になった一花の出てる恋愛映画を見たりして過ごした。
「どうだった？私の映画は？」
「前に比べると上達したな。」
「ブー。他には？私が可愛かったとか？」
「それは別に今に始まった事ではないから」
　五つ子は普通の目で見たら可愛い
「も～酷いなぁ…って、え、えっ？」
　私は顔が真っ赤になっていたと思う。
　好きな人に褒められて喜ばない人間等いない
　そっかぁー風太郎君私の事好きなんだ。
　私？勿論大好きだよ？
　アイシテルヨ。風太郎君♡
　両思いだったらやる事はヒ　ト　ツだよね
　その時から私の心には、他の人には触れさせたくない、風太郎君に自分以外、姉妹でさえも見て欲しくない強い独占欲が生まれた。
　きっかけはたった一つの何気なく言った言葉
　しかし彼女の頭は、ぶっ飛んでいた。
　だから彼女はその何気ない言葉を飛躍させて理解をした。
　例えるならば、縄文時代の生活からいきなり現代の生活へ変わるく

らい飛躍していた。
　こんな事で、彼の行く先は歪んでいくことになって行く
「風太郎君。今から家で語り合おうよ！お姉さんと一緒に　」
「断る。俺は今からお前と出かけた分の勉強をしないといけない。取り戻すんだ」
「まぁまぁ。そんなこと言わずに、さっ！」
　そう言うと足を引きづり無理やり連れていかれた。
　…顔超痛い
　連れられて来たのだが
「違くないか？」
「えっとね。衣装とか置くために部屋借りたんだ～気になる？」
「全然。早く帰りたい」
「もぉ～酷いなぁ。いいか。もう諦めてるし…
　さぁさぁ。どうぞ～」
「あぁ。少し話したら帰るからな。」
「分かったよ。」
「…お前相変わらず部屋汚いな…掃除しろ　」
「あはは…ちょっと片付けは苦手でさ」
　カチャ　カチッ　ガチン！
「最近どうだ仕事の方は？」
「まぁ、順調。かな？主役もやれたし」
「良かったな。だが忘れるなお前らの本分は勉強だ！」
「今日くらい忘れたって言いじゃん！ほらお姉さんとイイことする？」
　と言いながら胸を強調してくる
「ば、馬鹿な事をするな！俺はもう帰る。明日は三玖との約束があるからな」
　と玄関にダッシュをして開けようとしたが…
「…どういうことだ。」
　南京錠によって何重にも固められている。
「帰れないんだが。」

「ふふっ。だって帰さないもん。」
それと同時に痺れるような感覚が襲い意識はくらい闇へと落ちた。

目を覚ますとさっき迄いた所
起きようとするとカチャカチャと音がなり、手元を見ると手錠に足には縄
「犬か俺は」
いや。犬でも手に手錠足には縄はおかしいな。
首に縄くらいだわ。
「あっ。起きてくれた?」
明るく弾んだ声。この場には不釣り合いな喜びに満ち溢れてるそんな声
「どういう事だ。外せそして出せ」
「やだねー。風太郎君には今日からここに住んでもらいます!」
「は?」
突拍子もない事を言われ素っ頓狂な声が出る。
「住むと言ってもここにずっと居て私と暮らしてくれるだけでいいんだけどね。」
「そんな事了承すると思うか?俺にも俺の帰るべき家がある。お前にも」
「了承してもらうしかないね。あっ。縄と手錠は外してあげるね」
よし。窓から逃げれる
「ちなみに窓から逃げようと思わない方がいいよ。死んじゃうから」
よく見ると、窓には鉄線が張り巡らせてあった。
「これに電気を流しててね人が触れちゃうと死んじゃうくらい強力な電気が流れてる。私は焼けて黒焦げになった風太郎君でも愛せるけど 」
とハンカチをそこに投げるとハンカチは一瞬で焦げた。
「生活費なら心配しなくてもいいよ。私最近お仕事頑張ってるでしょ?だから2人で生活する位のお金はあるんだよ。」

俺はここに住むしか無いのか…

次の朝

優しく誰かに揺すり起こされ身体を起こす。

「おはよう。風太郎君。寝顔可愛くてずっと見てたよ。待ち受けにもしちゃった♡」

「あとこれお小遣いね。これでネットで好きなものでも注文してね。ちなみに何を頼んだか私ちゃんとチェックするし受け取りは管理人さんで届けてくれるからよろしくね！」

「俺はお前のヒモか。」

「本当は私が専業主婦になって風太郎君には働いてもらって、子供も3人くらい居てって言うのが理想だけど風太郎君逃げるじゃない？」

「五月とか四葉とかに助け求めるから叶わないなそんな夢」

「マダ…マダ…貴方の中にはあの四人が居るんだね。。

今いるのは二乃でも三玖でも四葉でも五月でもない。私、一花だけ。

早く忘れて私の事だけ考えて、過ごして。その方がミノタメ…ダヨ？」

それじゃ。仕事言ってくると付け足し言ってしまった。

俺はこれから数週間ヒモと言われる方がマシと言う監禁状況で過ごしていくことになる。

次の日から他の四人は阿鼻叫喚だったそう。

皆手が付かない状態で外をさ迷っていた。と後で聞いた。

私は見てしまった。

一花の部屋に彼がいた事を

一花が独占していたのか

いくら姉妹と言えど絶対ユルサナイ

どんな手を使ってでも彼を取り戻す。
私のモノにする。
私以外の人を見ず、考えず、そして合わせない
だって彼は
私ノ大切ナ人。夫となる人
昔から何でも五等分をして来たがこれだけは譲ることの出来ない
私こそが彼を独占できる権利がある
一花より私の方が彼を愛している
私は貴方しか要らない。貴方は私しか要らない
何より
私こそが彼に相応しいのだから

中野一花編　［完］

次女と後悔と嫉妬

「私に甘えなさい。」
「は？」
一花に監禁されそうになり、ギリギリで脱出に成功した、次の週
今日は家庭教師の日、家に入って早々1番に次女―二乃に言われた
俺は生憎人に甘えて興奮する性癖は持ってないし、何もこいつに対して想いがある訳でも無い
「ほら。ここは私の家でしょ？だから貴方は招かれた人、家主の頼みを聞きなさい。」
「別に理由を聞いた訳ではねぇーよ。
頼むのは、デリバリーピザと福の神で十分って言われてるだろ？」
「福の神とデリバリーピザのスケール差どれだけよ…」
「フータロー、フータロー、ここ教えて。」
「おぉ、三玖。そこはな…」
これが今私と上杉との距離。
仲良いと言われれば良いが友達の様な距離では無い。
これなら恋人になる。何て夢のまた夢だ。
きっと最初に反抗したから、私に苦手意識を持っているんだと思う。
三玖や四葉みたいに腕に抱きついたり、転ぶ振りをして匂いを堪能する。と言う事や
五月みたいにあいつの妹に頼んで、下着や服を貰い部屋で匂いを嗅ぐ。という事も出来ない。
…まぁ。五人全員であいつの食事に体液は入れてるけど。
「上杉さん！今度の日曜日に買い物に行きませんか！」
「行かない。面倒臭い」
「へぇ～。来ないんですか…
体液撒き散らしながら叫びますよ？」
「素直に泣き叫ぶって言えや！」
「ダメ。フータローは一緒に展覧会見に行くの。ね？フータロー」

「そんなの聞いてねぇよ…」
「来ないと体液撒き散らしながら叫ぶよ？」
「お前もか…」
「ついでに薬も混ぜる。」
「殺す気かよ…」
「コロッケ好きかよ？私作って来ようか？」
「三玖は下手なんですから私、四葉が作ります！」
「いや、勉強しろよ…」
「上杉さん！私は料理上手と誓いますか？」
「いや。知らねぇよ…」
「正直者の上杉さんには
・金の斧
・黄金のガチョウ
・金箔のおじいさん
をあげましょう！」
「色々童話混じりすぎだ！ってか金箔おじいさんって何の童話!?」
「そろそろ勉強を始めましょう。」
「…珍しいな。お前がやる気なんて」
「まぁね。」
だからこうやって地道に好感度を稼いでいく事しか出来ない。
「一花と五月は？」
「一花は寝てる。五月は、食べ放題に行った」
「ふぁぁ。おはよう…って風太郎君!?今日は家庭教師の日だっけ!?」
噂をすれば影なのか丁度一花は起きてきた
「そうだ。」
そう答えると急いで部屋に戻って行った。
パジャマを気にしてんだろうが、別に泊まった時に見たからな。
それなら監禁するなよ馬鹿やろう
暫くするとやっと出てきた。
「もう何時だと思ってるんだ。何時までも寝てるんじゃない。勿体ないだろ、」

「たはは…最近あまり寝れてないからかな？
　二十時間しか」
「ナマケモノかよ!?って思って調べたらそれ以上じゃねーか!?」
　※ナマケモノの睡眠時間は15～18時間
「信じられない…奴に勝ったなんて…」
「ナマケモノがライバルって恥ずかしくないか？」
　本当に気に食わないわね…何で私以外の女と仲良く喋っているのよ。
　と思ってしまう自分がいる。
　案外独占欲が強いのかもしれない。
　紅茶でも入れよう。
　ふふっ。また気遣いの出来る女って思われちゃうわね。
　でも、安心して。フー君
　私の全ては貴方のモノよ。
「紅茶入ったわよ。」
「わーい！」
　一花や三玖、四葉に配っていく。
　勿論フー君にも
「あっ。私のクッキー焼いたのがあるから。今持ってくるから。」
「上杉さん！私最近野菜の皮を見て、どんな性格か考えるのが楽しみ何です！Twitterに送ってくれればしますよ？」
「後悔しそうな事は辞めような」
　すると香ばしく、甘い匂いが立ち込めた
　そして皿1杯に並べられた美味しそうなクッキー
「…何も入れてないよな？」
「勿論。入れてるわけがないでしょう？
　いつ私が入れたのよ。」
「最初に睡眠薬入れられたの忘れないからな。」
「そ、そんな事をあったかしら…」
「口調変だし、面白いくらいに目が泳いでいるぞ。まぁ。それなら食べるが」

「美味しい？」
「あぁ。美味い」
顔を向け真面目に言ってやると恥ずかしそうに頬を赤く染めた。

ふはは！いつものお返しだ！
全部平らげ、ある程度勉強も進んだ所で
「私お花摘みに行ってきます！」
「私も」
「トイレか」
「デリカシー無いですよ！上杉さん！私達女の子なんですから。」
ハイハイ。と適当に流す。
金持ちだと家にトイレが何個もあるのか…
すると突然二乃が
「本当に私に甘えなくてもいいの？」
はぁ…何でそんなに甘えさせたがるんだ。
もう一度断る為口を動かそうとする
が
何故だ。
さっきと同じ様に断るだけじゃないか。
断る。たった2文字の言葉
本当に何故だ。
何でこんなに…

二乃を愛おしく思ってしまっているのか…

最初は彼女の片想い。
至って純粋な彼を思う恋心
しかし独占欲の強さでその恋が黒く、酷く歪んで行く。
彼を自分の虜にする。自分を好きになってもらう
そんな至って普通の想いがどうして彼女は
こんな風になってしまったのだろうか。
運命はここから変わっていってしまうのだ。

次女となんか…その…あれだよ！あれ＋おまけ

「私に甘えなさい」
脳に響く二乃の甘い、甘美な言葉
自分の身体が自分の物ではない様な身体が勝手に二乃の方へ動いてしまう。
母親を求める子の様に…

「いや。ダメだ」
自分に言い聞かせるように
「ふふっ。別に私は大丈夫よ？」
ここで負けたら家庭教師として失格だ
自分達は、ただの生徒と教師という存在
いくら同級生が生徒だとしてもそこの線引きはしっかりとしないと行けない

だが…
優しい笑みを浮かべる彼女
こちらに手を伸ばし自分の胸に俺の頭を引き寄せる
「アンタ結構頑張ってるじゃない？」
「そうか？」
彼女から漂う甘い匂いしかし落ち着く匂いでもあり、子供の頃を思い出してしまった。
「だからもっと休んでもいいのよ？」
「じゃあ床に寝かせてくれ」
「ダメよ。これにどれだけ掛けたと思ってるのよ」
「可笑しいと思ったらやっぱり犯人はお前か…」
「クッキーか、紅茶か、まぁ紅茶だろうな」
「よく分かったわね」
「さしずめ、三玖と四葉のやつには、下剤見たいな奴を仕込んでいたんだろ？」

「正解。さすがフー君ね」
「その呼び名は辞めてくれ…」
「フー君、アンタのには最初に見た人に惚れる。いわゆる惚れ薬を仕込んだの」
「最初に俺がお前を見る保証何て無いはずだが？」
「いつも私がからかっているからその仕返しをするだろうと読んだのよ。」
「その読みが外れたら？」
「そしたらこっちを向くようにからかうだけよ。」
「性格悪いな…」
「それが私よ。欲しい物の為ならなんだってする。」
「欲しいものが俺か…とんだ災難だ。」
「私見たいな美少女に好かれて嬉しくないの？アンタもしかして…」
「俺はホモじゃないからな。てかいい加減離せ。俺は帰る」
「いいの？あなたの黒歴史他の人に喋るわよ？」
「お前が知ってる訳無いだろう」
「前にガーリックライスを作ろうとして、ニンニクだと手に取ったらそれが実はチューリップのキュウコンで…」
「辞めろ！辞めてくれ…それ以来らいはに台所立たせて貰えてないんだ…」
「何で間違えたのよ…色も大きさも違うじゃない。何なら食べてたら毒あるから危なかったわよ…」
「寝ぼけてたんだ…」
「他にもあるわよ。えっと…」
「もう辞めてくれ！ほんとにお願いだから…」
「これに懲りたらもう私に反抗しない事ね」
「痛いほど分かりました…」
「あー。スッキリしました！何でいきなりお腹痛くなったんでしょう」
「分からない」
やばい…あいつら戻ってきた

「あー！二乃！ずるいです！」
やっと解放されたと思ったら次は四葉の胸の中
「私が最初にフータローをする。」
次には三玖の胸の中へと
相変わらずのやかましい勉強会。
少なくとも今はそうだった。
しかし段々と俺の頭の中は、中野二乃と言う女に侵されていく
彼女しか考えられない。彼女以外見ようとしない
彼女によって支配される日々へと変化して行く…

私は気づいていた。彼が変になってしまった事
その前兆
きっと惚れ薬かなんかを盛って、自分しか考えないようにしたんだろう。
ふざけるな。彼は私のものだ。
しかし彼を本当に取り返す準備が出来るまでの我慢。
待っててね♡
彼女こそが1番やばい。きっと殺人だって平気でする位に
今回で更にその闇は深まってしまった。
影は動かず、他人に悟られず。
機会をじっと待つだけ
彼女の闇に比べたら彼女達など足元にも及ばないのだ
次女編［完］
おまけ
ガチャと三番目の扉、三玖の部屋が開けられる
「四葉…入る時はノックして」
「別にいいじゃないですか！私達姉妹なんですから！それとも見られては困ることでもしてたんですか？」

ニヤニヤとした笑みを浮かべる、四女、四葉
部屋をぐるりと見渡して
「あれ？三玖３Ｄプリンター買ったの？」
「うん。」
「何作るの？」
「フータローのフィギュア。ほら」
彼女を指さす方を見ると確かに彼女達の家庭教師上杉風太郎のフィギュアが所狭しと並んでいた。
寝ている時の彼。何か食べようとしている彼
何故か上半身裸の彼。笑顔を浮かべている彼
様々な彼がいた。
「おー！上杉さんがいっぱい！何て幸せな空間！この上杉さんが気に入った！貰ってもいい？」
「その代わりフータローの写真１０枚分」
こんな取引があるということは彼は知らない。
五姉妹の秘密である

三女と距離と告白

二乃の薬漬けをギリギリで回避した俺は今日も元気に家庭教師に勤しむ
これでまた変な目に会うんだろうな…
意外と学習能力ないな。俺
「ねぇフータローここ教えて？」
「おう、ってかさ近くね？」
俺に質問をしてきた三女　三玖は俺のすぐ隣
間が１ｍも空いてないんじゃないかと言うくらいの近さにいる。

だから彼女の呼吸、心臓音が全て聞こえてくる様だ
「全然近くない。むしろまだ遠い」
「遠くねぇよ全然近いわバカもん」
「そうだよ～三玖。お姉ちゃんに譲らないの～？」
「お前は俺を監禁してただろ」
「フー君？私が１番よね？」
「薬持ったくせに何言ってんだか…」
「フータロー。浮気はダメ。そしてハグしよ？」
「ハッハッハ。過剰なスキンシップだな。
ここは海外じゃないぞ！
何を言ってんだアマンダ」
「…何ですかそのアメリカの通販番組のドラマ見たいな奴は」
「アマンダ？それって誰？ネエ誰？新しい女？」
ｏｈ……　ハイライトさんがコンビニに行かれてる…
「別に気にする必要はありませんよ。ただの上杉君の戯言ですから」
五月の冷静な意見により、ハイライトさんが戻って来たみたいだ。
ネエ？何でハイライトさんニゲルノ？
ずっとイテクレル？
じゃないと俺が死んじゃうから
命の危機に晒されながらも今日の家庭教師を平和？に終わらすこ

とが出来た
＊
彼を好きになったのはいつだろうか
図書館の戦国の本に全部彼の名前が書いてあった時？それともまた違う時？
いや。きっともっと前
彼と私には赤い糸があるんだ
幼い時から繋がる1本の糸が
それから彼の事を考えてしまう。
朝起きる時もご飯を食べる時も授業中も寝てる時も
それも無意識に。集中しようと思っててもどうしても彼の事を考えてしまう
それが恋だ。と気づくのは時間はかかってしまったけど
前の私なら五姉妹の双子なんだから五等分しないとと思っただろう。
しかし今は違う。いつぞやの彼の言った言葉
『公平に行こうぜ』
そして、私が林間学校の前に一花の振りをしてダンスの誘いを断る時の男子が言った言葉
『相手を独り占めしたい。』
フータローしか興味ないから、名前は覚えていないけど
自分の今の気持ちはそれに近い
フータローと付き合って
フータローに私だけを見てもらいたい
フータローの隣に居たい
フータローを独り占めしたい
そして…
フータローと結婚して家庭を持って幸せな結婚生活をしたい
彼がいれば何にも要らない。
友達も家族も名声も富も
料理も少しずつ勉強してるし、気づいて貰えるようにアプローチも

いっぱい掛けた。
やっぱり私にはこそこそやるのはきっと向かないのだろう。
不器用だから失敗しちゃうから
だから真っ直ぐに気持ちを伝えるべきだ。
秀吉も妻のねねに対して沢山ラブレターを送った。
家族や養子、側室に宛てた手紙全部で１００通の内３０通は妻に当てたもの
このように当たって砕けて、また当たってまた砕けて、また当たって、さらに当たって、
砕けなくなるまで当たるしかない
あるアニメのサブタイトルにこんなのがある
『ダイヤモンドは砕けない』と
自分はダイヤモンドの様になる。
そして直接気持ちを伝えるべきだ。
そう思った私は彼を屋上へ呼び出す。
いつもとは違うドキドキ、
きっと、一花に告白して行った虫けら共は、こんな気持ちを抱いていたのだろう。
無論彼以外興味無いからどんな気持ちになろうが知った事では無いが
緊張で口から心臓が飛び出てしまいそうだ。
やっと待ちわびた彼がやって来る。
相変わらず彼は何時でもカッコイイ
「どうした三玖」
「あっ…あの！ふ、フータロー。
わ、私…フータローの事がす、す、す…」
「酢？」
どうしたんだ三玖。酸っぱい物でも食べたいのだろうか。
「す、す、す、すき焼きって美味しいよね」
「は？それだけの為に呼び出したのか？確かに美味しいけど…椎茸とか舞茸とかえのきとか」

「キノコばっか…」
あ～自分のバカっ！バカっ！
彼に言いたいことはそれでは無いのにッ！
「キノコを馬鹿にするな。安いし、美味いし椎茸はバターで焼いてもいいし、煮物に入れてもよし、色んな料理に使えて万能なんだぞ！」
「それだけか？なら今から勉強するぞ。
アイツらが待ってる。」
そう言って戻ろうとする彼
何とか袖を掴み、それを阻止する
「違う。だから待って」
「何だ？」
ぶっきらぼうに言う彼。
「あの…私…フータローの事…好き…なの」
「まだエイプリルフールは早いぜ？」
「違う。本気」
考える素振りを見せる彼
言ってしまった…自分の気持ちを
どんな返事なのだろうか
了承か拒絶か
拒絶だったら…嫌だな…
「ごめん。」
彼の口から出たのは了承では無く拒絶の言葉
「フータロー好きな人いる…の…？
それとも私なんか…した？それなら直すから…」
「別に何も無いが…
俺とお前達は教師と生徒の関係だ。
いくら同級生であってもだ。
俺には今の自分の事で精一杯でな。他に人を幸せにする事が出来ない」
「私はフータローと居るだけで幸せなの！
隣に居てくれるだけで、優しく話してくれるだけで…我儘は言わな

い。それだけでいいから！」
「ごめんな。」
それだけを言って彼は行ってしまった。
1人になってしまった赤く照らされた場所で、これまでについて考える
ここまで自分達を諦めず、根気強く教えてくれ赤点回避が現実味を帯びて、その間に色んなことがあって、彼の優しさに触れて今まで自分を縛っていた『平等に』という考えから解き放ってくれて…
私達の為にあんなに奔走し、尽くしてくれた人
そこまでしてくれた人は今まで居ない
私の武将好きも引かないで肯定してくれて
彼の優しい所が好きだ。
妹を気にかけ、自由にさせてやりたい。と言う何とも彼らしい理由でバイトを掛け持ちして努力している彼が好きだ
自分の勉強もあるのに自分達の学習プリントを1から手書きでしている
しかも一人一人に合わせた内容を
そんな尽くしてくれているのに、断られるなんて有り得ない。
有り得ない。有り得ない。有り得ない。有り得ない。有り得ない。有り得ない。有り得ない。有り得ない。有り得ない。有り得ない。有り得ない
あっ…そっか。きっと誰かに脅されているんだ。
だから私の告白を断ったんだ。
ならもう付き合ってるって事でいいのかな。
別にいいよね。

彼に対する自分の真っ直ぐな気持ちを気づいて欲しい
しかしその気持ちは、普通とは違い捻れ、歪み、黒く澱んでいる。
もはや、真っ直ぐな気持ちとは言えない
一方的な愛である。

しかしその一方的な愛は愛とは言わないのだ

三女と遅れてごめんね？

三玖に告白されて、断ってから何となく三玖とは、話しずらくなるかな。と思っていたが、あちらは何事も無かったかのように、振舞っている。

それに対し、俺はちょっと意識をしてしまっている。

…馬鹿みたいだな。

あんなに恋愛は必要ない。と言っていた俺が恋愛に振り回されるなんて…

ま、まぁ。三玖が気にしていないなら、俺も家庭教師の仕事がやりやすい。

それに越した事はないからな。

「上っ杉さん！上杉さんの座右の銘は、何ですか！私はちなみに右も左も1．0です！」

「それは、左右の目だな。」

「あれ…？そうでしたっけ？」

「四葉貴方…本格的にやばいんじゃないの…？」

「大丈夫だよ～二乃～」

「それじゃ、風太郎君始めようか。」

「珍しいな、一花がやる気なんて」

「別にー。今全体的に私の印象悪いから、ここで好感度上げとこうとか思ってないし…」

「一花って、打つと最初にクズって出てくるもんな。俺はヤンデレだったけど」

「多分それ性癖のせい…」

そしていつもの机に座り、教科書を開く。

さて、今日は…

ん？何故か身体の右の方から温かさを感じる…

「犯人はお前か。三玖。近いんだよ。」

「全然近くない。むしろまだ遠い」

「遠くねぇよ全然近いわバカもん」
あれ？前にこんな事があったような…
これがデジャブか！
「上杉さん知ってますか？最近、屋上で告白された人がいるそうで…しかもその人、ある人と深い絆で結ばれてるのに。ですよ？上杉さん何かシッテイマスカ？」
「へ、へぇ～今どき屋上で告白するやつ居るんだな…」
何か四葉が怖い。
いつもの明るい雰囲気ではなく、冷たく突き刺す様な感じ
そしてそれは横にも…
「むぅ～」
頬を膨らませ、こちらを見つめている三女。
いや、怖くなかったわ。
可愛い部類だわ。
ちょっと前？に流行った水を吐くフグがなんかに似た何かを感じる。
「フータロー、褒めないで／／／褒められても、内蔵しか出ないから」
「出すな」
「オボォ。オボォボボ」
「出すんじゃねぇ！」
やっと、三女が参上！ってか！
アッハハハ。くだらな。
「三玖、あんたちょっと私のフーくんに近づきすぎじゃない？困るのよね。私の物に手を出されると。」
「誰がお前の物だ。」
「フータローの言う通り。フータローは、私の物、私は、フータローの全てを知っている。だから、私が相応しい。」
次女ｖｓ三女の戦いが本格的に勃発！…する前に止める
「お前らいい加減やめろ。纏めて２人を八つ裂きにした上で手当してやろうか？」
「何で八つ裂きにしたあと手当しちゃうんですか！上杉さんって優し

いですね！」
「八つ裂きにしている点で優しくは無いと思うんですが…」
「三玖？やっぱり今は料理上手な方がモテるのよ？貴方の炭を量産して、フーくんを具合悪くような料理を作る人は、何かあれよね～」
「二乃。うるさい。最近はマシになってるし。そんないかにもギャルみたいにしてたら、尻の軽い女と思われてフータローが可哀想、」
「あら？これはオシャレよ？そんなのも知らないのかしら？」
「あぁ～！お前らうるせぇ！豆腐で殴んぞ！」
「豆腐が勿体ないじゃない！食べ物は大切によ。フー君♡」
「突っ込む所そっち!?」
その後は、一花、俺、五月で２人を止めた。
四葉？ずっとオロオロしてた、

＊　＊　＊

何とか今日も終わり、家に帰るべく、荷物を纏め家を出る。
あれ？何か似た展開多くね？
いっつも何かあったら、帰る所までカットされている気がする。
そして、俺は世界の闇を感じながら帰路を辿る。
すると、どこからか視線の様なものを感じるのだ。
自分の事をねっとりと見てくるような視線
（でも、男、ましてや俺を見てくる奴なんて居ないだろう、気の所為だ）
と自分の中で結論づけて、また歩き出す。
しかし、いつまで経っても視線を感じる。
周りを見渡してみても、誰も居なかった。
不思議な事もあるもんだ。
今日は特に気にせずに帰ることにした。
…すぐ後ろに潜んでいたにも関わらず。

＊　＊　＊

学校にいつも通り五姉妹に無理矢理一緒に連行された。

いつもより早く家を出たにも関わらず。
三玖曰く
何かそんな気がした。気にしたら敗北者だと。

んー、何に負けるんだろ？
てかそれをピンポイントで当ててくるあいつらの勘すごくね？
そして、五月のせいで遅刻ギリギリで、到着し下駄箱を開け、内履きを取ろうとしたら、その中に可愛くデコレーションされた手紙が目に入った。
気になって開いてみる。
そこには、可愛らしいく丸文字で
俺の昨日1日の詳しい日程。
何時何分何秒どこ何処にいた。誰と話した、
それらが事細かに書かれていた。
う～ん。丸文字とのギャップがすごい。
「フータロー。どうかした？」
三玖が固まっている俺を不審に思い寄ってきた
話してもいいが、こいつらは別に興味ないだろうし、余計な事を話すものでは無い
「別に、何でもない。」
誤魔化すことにした。
「そう…ならいい。何か合ったら私に言って。フータローの為に解決出来るように頑張るから、」
「ありがとな。三玖、」
何と三玖は、心優しいのだろうか。
そして俺はこの手紙を気にとめなかった
少なくとも俺は、軽く見ていた。何かの手違いだと。
思えばここで何かアクションを起こしていたらその後何事も無かったのかもしれない…
＊　＊　＊
今日も暗い夜道を歩いていると視線を感じる。

いい加減やめて欲しいものだ、
（犯人は誰だろうな。）
と思い立ち、角を曲がり直ぐに脇道にそれて、身を隠す。
すると、キョロキョロとしている人物がいた。
（あいつか…）
近づこうとした、が思わぬ人物で驚いた
「三玖…」
犯人は三玖だった。
「バレてしまっちゃ叱られたくない。」
「仕方がないだろ。ど正直か！」
「なら、もういいよね？」
そう言うと同時に、俺は意識は落ちた。
＊　＊　＊
ゆっくりと目を開ける。
手や足は動かないように固定されており、身動きが取れない。
そして目の前に俺をこんなにした犯人がいた。
「フータロー。寝てる時もかっこよかった。
また百枚くらいフータロー写真のストックが増えた。」
目の前でパシャパシャと音がする。
あ～水素の音～
そう言えば関係ないけど、水素水飲むより、牛乳飲む方が水素の発生量は、多いらしいね。
現実逃避の今日の豆知識、略して今日豆を終わし、しっかりと向き合おう。
「よし、何となく分かってるけど一応聞こう。何故こんな事を？」
「フータローが好きだから」
知　っ　て　た　☆
伊達に2回も一花と二乃に変な事されてないじゃこらぁ！
「フータローをずっと見てた。いつも。
違う女の子に引っかからないように。
そして、何処で何をしているのかを知る為に。二乃とか一花、四葉、

五月に盗られないように。そしてフータローにいつも見ている事を知ってもらうために手紙を入れた。」
　ん～もう手遅れ！2回くらい捕まりました☆
「フータロー前にこんな事を言ってくれた。
『公平に行こうぜ』って、」
「あ、あぁ。確かに言った記憶があるな。」
　あれは確か林間学校辺りだっただろうか。
「だから、皆公平に、フータローにアピールをしてる。けど私何回しても振り向いてくれないから。無理矢理見てもらおうと思って」
「話を聞く限り、今の所公平さの欠片もねぇよ！」
「だから、ここの場所は皆に伝えた。返してほしければ！って」
「誘拐犯か。あ、いや。合ってんな、誘拐されたわ、俺」
「だけど鍵が空いているとは限らない。
　カギだけに。」
「何なの？お前らオヤジギャグ流行ってんの？」
「言い始めたのはフータロー。」
「き、記憶にないなー。」
「あとさ、やっぱり公平さの欠片もねぇよ！場所教えてるけど入れないとか！ブックオフなのに本がないくらい重大な事だぞ！」
「気にしたら負けるよ？あとそれほど重大な事では無いよ。」

「何に負けるんだよ…」
「何で負けたか明日まで考えといて下さい、
　そしたら何かが見えてくるはずです。
　ほな、頂きます。」
「何処ぞのジャンケンくそ強サッカー選手のモノマネすんじゃねぇ！」
「ってかなり話が脱線したけど、あいつらの助けは望めない…か。」
「これからは、ずっと一緒に居られるね、フータロー♡」
　今までで1番平和だわ。
　これでいいかもしれない

五女と出会いとデート

思えば彼女との出会いは、最悪だった。
俺はいつもの様に、焼肉抜き焼肉定食を頼み、
いつもの席に座ろうとした時に彼女と出会った
そして2人は互いに席を譲ろうとせず、
2人は今後もいがみ合い、喧嘩し、ここまでやって来た。
しかしここ最近は色々な出来事が重なり、彼女との仲もよくなってきたと思う。
彼女への距離が近づけば近づくほど、彼女と俺は似ているということに気づいた。
もしかして、最初の方は同族嫌悪だったのかもしれない。
しかしあの五つ子の中では珍しく、俺との波長が合う1人だ。
はぁ、とため息を吐き、頼んでから随分と立って冷えてしまった紅茶を1口飲む。
今ではこれ、だからなぁ…
そして向かいの席に座っている方へ目を向ける
目の前に人が埋もれて見えなくなる程の大量の甘い物、美味しそうにケーキを頬張りとても幸せそうだ。
そしてこちらの視線に気づいたのかこちらに問いかける
「…何かついてますか？」
「別に。」
「そうですか、上杉君も、いっぱい食べていいんですよ？」
と興味無さそうに目の前のケーキを食べ続けている。
俺達は今、スイーツパラダイス、略してスイパラと言う所に五姉妹の五女、五月と来ていた。
昔なら彼女と来るのを拒否していただろう。
しかし今は異性の友達として、出かける機会も多くなった。
こいつなら気兼ねしなくてもよくて楽だ。
スイパラに来たのは、なんでもカップル割り。と言うのがあるそうで安くなるらしい。

何でカップル割りなんて作るんだ。
だったら友達割り。とかおひとり様割りとかあってもいいだろ。
誰にでも恋人がいる訳ではないし…
俺は、紅茶をもう一口飲み、周りを見るとやっぱりと言うべきかカップルや女友達で溢れていた。
あ～ん。をしながら食べているカップルもいる。
…絶対食べにくいだろ。普通に食べさせろよ
そして、俺が持ってきたモンブランを食べる。
栗とクリームの甘さがいい。
しかし、甘過ぎない絶妙な甘さ
ショートケーキ何かは、2つ以上食べると、ウプっとなってしまう俺だがこれならいくらでも食べられそう。
五月は、もう何個目か分からない程の量を食べている。
全種類でも制覇するのだろうか。
今は、シンプルないちごのショートケーキ。
…意外と美味そうだな。
しかし今から持ってくるのもあれだし、ひと口くれ。とも言えるはずがなく、どうしようかと1人で考えていると
物欲しそうな目をしていたのがバレたのか
「もし…もし良かったら何ですがひと口食べます？」
こちらにケーキを載せ、向けてくる。
「一応…カップルと言う事で来てますから、こ、こういう事をしないと怪しまれます。」
顔を真っ赤にしてそういう彼女、
別に店員は一々見てねぇよ。と言いたい。
しかし食べたいのも事実なので恥ずかしながら差し出されたものを食べる。
…見た目通りうめえ…
もっと詳しく言え？
可愛い物は可愛いって言うだろ？
美味いもんは美味いって言うだろ！

五月は、何事も無かったかのように、食べている。
しかし、
フォーク等は変えていないわけで…
「お、おい。フォーク…」
「あ…べ、別に気にしませんから！
むしろ体液が身体に入って嬉しいなんて全然思ってませんから！
姉妹の中では普通でしたので！これを機に私とこ、こ、恋人だ。何て勘違いしないで下さい！」
「なんて言ったのかは知らんが、分かった。」
そんな慌てる事ないだろ…
嫌ならそもそもとしてするなよ…
「最近は、どうだ。勉強は上手く行ってるか？」
「えぇ、お陰様で。本当に上杉君のお陰で」
「別に俺は何もしてない。ただこれから家庭教師をやる上の障害になると思っただけだ。
自分の為だ」
「ふふっ。そういう謙虚な所、周りを思いやってる所好きですよ？」
「な…おまっ…」
何気ない五月の一言で顔中から一面に湯気が湧き出すような気がして
「その褒めるとすぐ照れる所可愛いですね」
「や、やめろ、ってお前だって顔真っ赤だぞ？」
「き、気の所為です！
こっち見ないでください…」
「でも五月が一緒だと、気兼ねしなくて楽だ。あいつらだと疲れる…」
「そ、そ、それは告白…」
「ち、違ぇよ！バカ、」
「でも、たまにはこんな日も良いもんだ。」
「ええ、本当に、上杉君と一緒だからでしょうか？」
そう言いながら微笑む彼女。
その笑顔は、太陽の様に暖かくて眩しく、爆弾の様に爆発をしてし

まうような危険を持っていた。
少なくとも、俺は気づけなかったのだ。
彼女の秘密に…

五月と本当の気持ち

彼を好きになったのはいつ頃だろうか？
失礼なそして変な人。
それが、彼に対しての第一印象。
普通なら席を譲る所、一向に譲らず、そして何より焼肉定食焼肉抜き。という一風変わった食事をしている。
彼が私たち姉妹の家庭教師という事が分かったら、嫌悪感を覚えた。
私が皆の母親になる。という一心で今まで生活してきた身としては、彼はとんでもない不安要素であった。
何か私の姉達がされるのでないか？と
そんな、心配と裏腹に彼は私達に親身に接し、
優しく私達を導いてくれた。
彼の底なしの優しさは、私とその姉達を良い方向へと変える道標となった。
彼が導いてくれる。
彼がいてくれる。
彼が居るだけで自分はふわふわとした気持ち。
そして、心が暖かくなるような気持ちになった。
彼がいるなら大丈夫。
それが、私達姉妹の共通の認識だった。
それほど迄に彼に惹かれ、依存をしていた。
あの二乃でさえ、惚れてしまう程に
そういう私も彼に惹かれている1人
けど自分は他の姉達みたいに素直になれないから、
一花みたいに色仕掛けをしたり
二乃みたいに薬を使ったり
三玖みたいに監禁をしたり。
四葉みたいに馴れ馴れしくしたり
自分にはどうも恥ずかしさ等が邪魔をして、彼を過激（守る）様な行動に出

れない。
自分には困ったものだ。
そして何より私は彼に対して、気持ちを伝えられていない。
だから、彼に自分の気持ちを伝える為、何回か彼をデートに誘った。
彼は多分デートとして認識していないだろうけど…
＊　＊　＊
デート。という事を認識してもらう為に今回はスイーツパラダイスのカップル割りというものにした。
途中私は、何とも大胆な事をしてしまった…
（ま、まさか…私があ～ん。をするなんて…）
彼女は今、顔を真っ赤にしている。
まるで茹でたタコみたいに…
ってよく表現で使われるけど、茹でたタコってそこまで赤く無くないですか？
どっちかというと、薄い赤辺り
じゃあ、こう言えばもっと赤さが伝わるんじゃないですか！
例えば
茹でたケチャップみたいに…

…茹でたケチャップはおかしいですね
こっちか
まるでケチャップみたいに…
うん。ダサいです…
私のボキャブラリーの少なさを痛感します…
おっと…話が逸れてしまいました。

＊　＊　＊

彼女は顔を赤く染めている。
「おい。五月。大丈夫か？」
忘れていた…今は上杉君と帰っている最中でした

こうして彼は、こちらの心配をしてくれる。そして今も何気なくいるが、しっかりと彼が車道側を歩いている
そんな彼のさり気ない優しさが好きだ。
「ええ、大丈夫です。ありがとうございます。」
「具合い悪かったら言えよ?あんなに食べたんだから、腹を下すかもしれんぞ?」
「私は、お腹は弱くないので。」
「勉強は順調か?」
「お陰様で」
彼との何気なく交わす会話が好きだ。
彼の肌が好きだ
彼の匂いが好きだ
彼の声が好きだ
彼の優しさが好きだ
彼のお風呂は頭から洗うのが好きだ
彼の妹に対する楽にさせてやりたいという優しさが好きだ
急に笑顔にして言うと彼が恥ずかしがって、目を逸らすのが好きだ
彼の全部が好きだ。
彼に触れたい。抱きついたい。嗅ぎたい。
でも私は他の姉の様に素直になれなくて…
自分の気持ちをそのまま伝えれなくて…
そんな自分が嫌になる。
どうして自分は素直に気持ちを伝えれないんだろう。
なのに何で彼をここまで愛してしまっているのだろう
だから私は今日も
リストカット(我慢)する
この想いが伝わる日まで。

そして、その日五つ子の内四人は、
彼を共有して、愛していく事を決めた
監禁という手段によって…

四女と五つ子会議と闇　改訂版

私、四葉は家庭教師をしてくれている上杉さんが大好きだ。
しかし、自分のせいで、皆で留年する事になってしまった出来事があってから姉、妹達に幸せになってもらおうと。
そうなるように全力でサポートしようとした。
言ってしまえば、罪滅ぼしのつもりだった。
自分の幸せなんてどうでもいい。
姉、妹達が幸せなら……
それが迷惑をかけてしまった私に出来る事
しかし、それは変わってしまった。
今まで彼女達の幸せを願い、サポートしてきた私だが、
『運命の人』
と言うべき人が出来たのだ
それが彼、上杉風太郎

彼だけは、他の姉妹達にも絶対に取られたくない。
他はどうでもいい。
彼さえ私の隣に居て、笑ってくれてたら。
私のモノになってくれたら。

けれども、初めて出来た欲しい物は中々手に入らなくて、ライバルがいっぱいで、それが自分の家族で……他にも居て……
前に、初めて彼が家に来た時に、膝枕をしながら言った言葉
「大好き」
あれが、あの時に私に出来た精一杯の愛情表現だった。
しかし、彼は一向に私の好意には気づいてくれなくて。
他の姉妹達にばっかり構っている
彼女達からも様々な愛情表現を受けながら。

そうして考えていたら、私の携帯がブルルと震え、通知が来たこと

を知らせる。
私たち姉妹のグループだった。
そして、そこにはこう書いてあった
『上杉風太郎を共有する為の作戦を考える』と

＊　＊　＊

中野家、リビングにてその作戦会議は開かれた。
今日は家庭教師の日であったが、無理やり今日は無しにした。
「そういえば、最近、スマホのメッセージアプリに変な人の追加あったのよね～
まぁ、変な事される前にブロックしたけど」
会議開始を待っていた時間で二乃がそう言った。
「それ、私もありました。」
五月もそれに頷く
「それ、私もあったよ～何処かの芸能界の奴かな？って思ったんだけど。」
それに続き、一花、それから三玖も相槌を打って頷いた
「私もあったよ！何か最近そういうの増えてるみたいだね。」
そして、私、四葉も頷く。
「本当に何処から私たちの連絡先とか取ってるのかしら…」
会議の前に軽く談笑する。
でもこの時間さえ私には無駄だ。
この少ない時間でも、上杉さんに会いに行って喋りたい…
私は、上杉さんがずっと近くに居なければ生きていけない身体なのかもしれない。
「これから風太郎を私達全員で五姉妹らしく、共有する作戦を考えます！」
長女である一花が進行をするみたいだ。

「絶対にフー君は私の事が1番好きなのよ！でも平和的にフー君を共有する為に仕方なくだからね！」

「二乃違う。フータローが1番好きなのは私、料理褒めてくれた。戦国時代カフェにも2人で言って、キスもした。」

「わ、私だって！彼と一緒にスイパラに行きましたし、あ～んもしました！私に決まってます！」

そして、この姉妹達も何を言ってるのだろうか

上杉さんが誰かに抱いている好意を自分だと信じて疑わず、争う。なんて醜いのか。

「まぁ、まぁ…」

一花がその場を諌める

「取り敢えず、風太郎君を共有するのは決定ね！いいでしょ？皆。」

「一応賛成ね。ふふっ。フー君とずっと一緒に居られるのが楽しみだわ。」

「私も。フータローといっぱい色んな事する。」

「わ、私もです！今からとってもウキウキしてきました！」

「四葉も良いでしょ？」

さも、当然のように私に同意を求めてくる一花。

私はそれに対してこう言った。

「勿論！嫌です。」

「え……？」

4人全員がポカーンと口を開けたまま、暫く開いた口が塞がらなかった……

＊　＊　＊

いつもの私と違う反応を示したので、びっくりしたのだろう。

「ご、ごめん。四葉。私の聞き間違いかな…？もう1回言ってくれる

？」
一花が困惑しながら、尋ねる。
「勿論。嫌と言ったよ！」
何で、共有なんて事しなくてはいけないのだろうか。
好きなモノは独り占めしたい。
それが、普通なのではないだろうか。
私が、ずっと、ずっと、大切に想い続けてきた人をこの姉妹はどんな扱いをしたのだろうか。
睡眠薬を盛り、家に帰したり、上杉さんから逃げたり、せっかくの上杉さんの誘いを断ったり、秘密にしてきた事で上杉さんに迷惑を掛けたり。
私はそんな扱いをしていない。
彼を大切に、とっても大切に想っているから。
途中から、好きになった癖に、クラスの人達も前は上杉さんを疎んでいたのに。
上杉さんがどれだけ今まで大変な思いをしたか。
きっとこの人達には分からないのだろう。
急に態度を変えて、馴れ馴れしく擦り寄ってきて。
そんな穢らしい姿で、上杉さんに近寄るな。

上杉さんの事を好きなのは、私1人だけでいい。
私はそんな彼に酷い扱いをする訳がない。
上杉さんの周りには私1人だけ入ればいい。
彼がもう傷つかないように。

彼の味方は、私1人だけでいい……

彼が私に依存してくれる様に……
私だけを見てくれる様に……